芥川竜之介〝西方の人〟注解（一）

中野恵海

はしがき

芥川龍之助が田端の自宅で、ベロナアルおよびジャールの致死量を飲んで自殺を遂げたのは、昭和二年（一九二七）七月二十四日の未明であり、「続西方の人」の書きあげられたのが二十三日であるという。又「西方の人」には七月十日の擱筆日時の記入があって、この「西方の人・正続」こそは文字通りの彼の遺稿であり、枕頭に聖書の一冊置かれてあったことと相俟まって我々に深い関心をいだかせる。佐古純一郎氏が述べられたが如く、この作品は、その見出しの立てかたや、全体の構成から見て、「イエスの生涯」を描こうとしたことは明らかであり、そのおおよその線はルナンの「イエス伝」に沿っているとも言えなくもないが、彼自身が述べた如くそれは「わたしのクリスト」をはばかりなく描いたものであり、これも又彼自身の言葉「我々人間は彼の前におのずから本体を露してゐる」（続西方の人・3）、が奇しくも道破したように、芥川の自我像をそこに見る事が出来るとも考えられる。

「西方の人」は誠に難解である。そして、キリスト教の正しき信仰の立場から、彼の信仰の姿を批判するという事が必らずしもこの場合作品の理解を深めるものだとも言えない。拙稿はひたすらにこの作品にあらわれた彼の本音を追求する。「おのづから露してゐる」彼の全き本体を見とどけたい。形式は全く平凡に、「注」と「解」とに分けた。「注」は殆んど他書の恩恵によるものであるが、当然のことながら出来るだけ批判的な態度を志したつもりであるし、それは「解」に至る基礎的な裏づけの意味をもつものである。「解」はこれ又甚だ大胆にやった。弁解じみた言葉ながら、出る杭は打たれる事を大いに覚悟したものである。恥知らずとの非難や嘲笑は必至であろうが、こういうものはつつましくやったのでは面白くない。そして意義も薄かろうと考えて懸命に愚考の種々をさらけ出してみたのである。

附言。大阪国文談話会・近代部会では「芥川竜之介研究」の一部として「西方の人」がとりあげられ文字通り一章一章について共同研究がなされている、拙稿はそこから生れたものであり、勿論直接間

接に部会の恩恵を受けているのであるが、本稿は部会の研究の結果をまとめたものではない。部会のメンバーの一員としての私見をまずはじめに発表したとでもいうものであり、これがきっかけになって部会の研究がまとめられることにでもなれば誠によろこばしい事であると考えている。

西[1]方の人

1 [2]この人を見よ

わたしは彼[3]是十年ばかり前に芸術的にクリスト教を――殊にカトリック教を愛してゐた。長崎の「[4]日本の聖母の寺」は未だに私の記憶に残ってゐる。こう云ふわたしは北原白秋[5]氏や木下杢太郎[6]氏の播いた種をせっせと拾ってゐた鴉[7]に過ぎない。それから又何年か前にはクリスト教の為に殉じたクリスト教徒たちに或興味を感じてゐた。殉教者の心理はわたしにはあらゆる狂信者の心理のやうに病的な興味を与へたのである。わたしはやっとこの頃になって四[8]人の伝記作者のわたしたちに伝へたクリストと云ふ人を愛し出した。クリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることは出来ない。それは或は紅毛人たちは勿論、今日の青年たちには笑われるであろう。しかし十九世紀の末に生まれたわたしは彼等のもう見るのに飽きた、――寧ろ倒すことをためらはない十字架に目を注ぎ出したのである。日本に生まれた「わたしのクリスト」は必しも[9]ガリラヤの湖を眺めてゐない。赤あかと実のった柿の木の下に長崎の入江も見てゐるのである。従ってわたしは歴史的事実や地理的事実を顧みないであろう。（それは少くともジャナリスティックには困難を避ける為ではない。若し真面目に構えようとすれば、五六冊のクリスト伝は容易にこの役をはたしてくれるのである。）それからクリストの一言一行を忠実に挙げてゐる余裕もない。わたしは唯わたしの感じた通りに[10]「わたしのクリスト」を記すのである。厳しい日本のクリスト教徒も売文の徒の書いたクリストだけは恐らくは大目に見てくれるであろう。

（注）

①西方の人　「セイホウノヒト」と読むべきようには思われるが、本書「19ジャアナリスト」の本文に「西方の古典」の語があり、「さいはう」とルビがあったりして必らずしも「セイホウ」と決定すべきでないようにも思われる。尚、「37東方の人」の本文によれば「東方の人」とは、仏陀、老子、孔子をさしており、この「西方の人」とは勿論、イエス・クリストをさしている。西方、東方という風な呼称は例えば、吉川幸次郎氏の「事実と虚構」に〝西方の人々が、今やわれわれ東方の文明への関心を増しつつあるのは、慶賀すべき現象である〟とあるが、これは西洋、東洋の意味から西方の人々、東方の

文明という風につかっているので、「西方の人」が直ちにイエス・キリストをさす様な慣例はなかったと思われる。だから芥川がイエスをさして「西方の人」と呼んだ気持には、或る種のハイカラな表現意識のほかに、イエスに対する親しげな、そして神格化されたイエスを人間扱いする風な語気が感じられるのではないか。

②この人を見よ　ニーチェの著「この人を見よ」Ecce homo (1888) をとったものであろう。ニーチェの口真似をしたのであろうがむろん、超人哲学の超人の意を含めたものにちがいない。

③彼是十年ばかり前に　「西方の人」には昭和二年（一九二七）七月十日の擱筆日時の記入があるので、これより十年程前の彼のキリシタンものを挙げてみる。㈠奉教人の死（一九一八・三田文学）㈡きりしとほろ上人伝（一九一九・新小説）（尚、この歳五月菊池寛と長崎に旅行し南蛮キリシタン趣味にひたった）㈢南京の基督（一九二〇・中央公論）。本文には「クリスト教の為に殉じたクリスト教徒たちに或興味を感じてゐた」とあるが、それは作品㈠㈡を指すものと思われる。

④日本の聖母の寺　長崎の大浦天主堂のことと思われる。長崎市内にある日本最古（元治元年一八六四創建）のカトリック教寺院で現在は国宝建造物に指定されている。芥川は大正八年及び十一年の長崎旅行の際に見物した。「長崎日録・大正十一年五月二十日」の記には「払暁、与茂平、春夫の二人と『日本の聖母の寺』に至る。弥撒の礼拝式に列せん為なり。松ケ枝橋を過ぐる頃、未だ天に星光あり」とあり、松ケ枝橋は大浦天主堂への上り口附近にある。「我鬼句抄」に「天雲の光まぼしも日本の聖母の御寺今日見つるかも」「天雲のしきはふしたよ日本の聖母のみ寺けふ見つるかも」がある。

⑤北原白秋　明治十八年（一八八五）～昭和十七年（一九四二）。詩人、歌人。「邪宗門」「思ひ出」等の詩集により明治末期から詩壇の第一人者となり、歌集「桐の花」で短歌に新風をうち立て、ゆたかな色彩感覚と異国情緒を自在な韻律に歌いあげた。又「赤い鳥」における童謡運動の功績も大きい。

⑥木下杢太郎　明治十八年（一八八五五）～昭和二十年（一九四二）詩人、作家、医師。白秋らと共に「明星」末期、「スバル」等の詩壇に活躍、南蛮趣味、異国情緒を高雅に歌いあげた。又日本のキリシタンの事跡を詩化、劇化し、更に近世初期に渡来したポルトガル宣教師たちの研究を試みた。

「文芸的な、余りに文芸的な・（六、僕等の散文）」に、「僕等の散文が詩人たちの恩を蒙ったのは更に近い時代にもない訣ではない。ではそれは何かと言へば、北原白秋氏の散文である。僕等の散文に近代的な色彩や匂を与へたものは詩集『思ひ出』の序文だつた。かう云ふ点では北原氏の外に木下杢太郎氏の散文を数へても善い。」とある。

⑦鴉　「権兵衛、種播きや、鴉がほじくる」という俗諺をふまえて、ここでは他人の労苦を利用して、楽々とその収獲をわがものにするの意に用いている。もとは、権兵衛の間抜けぶりを諷しているものと思われるが、芥川がここでとりあげた鴉のイメージには、労することなく種播く人の種をついばむ、ずるい、軽薄な人間という

自嘲的口吻がある。

⑧四人の伝記作者　「新約聖書」の「マタイ伝」「マルコ伝」「ルカ伝」「ヨハネ伝」の著者

⑨ガリラヤの湖　パレスチナ最大の淡水湖で、ヨルダン川が湖の北東部にそそぎ、南西端より出ている。預言者たちやイエスが活動した土地。

⑩「わたしのクリスト」を記す　「わたしは歴史的事実や地理的事実を顧みないであろう」と述べているのでも明らかな如く、芥川は自分の「感じた通りに」クリストを描くのであって、世間の常識とか既成概念などにわずらわされないという意味である。それは自己に忠実であるという事の一つの宣言でもあるだろう。

（解）

この章の主旨は「西方の人」を書くに当っての緒言であって、それは「わたしのクリスト」を書くという一語に尽きるようである。歴史的事実に基づく詳細なイエス伝を書くというのではなく、西方の超人、イエスに対する芥川の私見をぶちまけようと言うのである。イエスをかく考える、或は私はイエスをこう見た、というのが内容である訳で、所謂、イエスに自己対決するというのがこの作品の眼目であるだろう。従ってこの種のものの性質として、そこにイエスを一つの鏡とした芥川竜之介の自画像が浮かびあがるという事にもなる訳である。

2　マリア①

マリアは唯②の女人だった。が、或夜③聖霊に感じて忽ちクリストを生み落した。我々はあらゆる女人の中に④多少のマリアを感じるであろう。同時に又あらゆる男子の中にも。――いや、我々は炉に燃える火や畠の野菜や素焼きの瓶や巌畳に出来た腰かけの中にも多少のマリアを感じるであらう。マリアは⑤「永遠に女性なるもの」ではない。唯⑥「永遠に守らんとするもの」である。クリストの母、マリアの一生もやはり⑦「涙の谷」の中に通つてゐた。が、マリアは忍耐を重ねてこの一生を歩いて行った。世間智と愚と美徳とは彼女の一生の中に一つに住んでゐる。ニーチェの叛逆はクリストに対するよりもマリアに対する叛逆だつた。

（注）

①マリア　聖母マリア。クリストの母。

②唯の女人　平凡な普通の女性の意。イエスを生んだという事で神聖化され過ぎている事に対して言ったものであろう。神聖化するという事の一つに「永遠に女性なるもの」という観念があるのであろう。

③或夜聖霊に感じて　「マタイ伝」第一章十八、十九、二十、二十一、には「イエス・キリスト」の誕生は、左のごとし。その母マリ

ア、ヨセフと許嫁したるのみにて、未だ偕にならざりしに、聖霊によりて孕り、その孕りたること顕れたり。夫ヨセフは正しき人にして之を公然にするを好まず、私に離縁せんと思ふ。斯て、これらの事を思ひ回らしをるとき、視よ、主の使、夢に現れて言ふ『ダビデの子ヨセフよ、妻マリアを納るる事を恐るな。その胎に宿る者は聖霊によるなり。かれ子を生まん、汝その名をイエスと名づくべし。己が民をその罪より救ひ給ふ故なり』

④多少のマリアを感じる　芥川は次の六つを挙げている。㈠あらゆる女人の中に、㈡あらゆる男子の中にも、㈢炉に燃える火、㈣畠の野菜、㈤素焼きの瓶、㈥巌畳に出来た腰かけ。㈠は特定の、特殊な女性ではないという意であり、㈡は、それは女性という性別にもよらない事であるとし、㈢、㈣、㈤、㈥などの素材から我々は詩人としての芥川の好みなどを見る思いがするが、㈢に原始的なもの、㈣には野性的なもの、㈤や㈥には飾り気のない、素材なものが感じられる。表現そのものは、何気なく、さり気なくこれらのものを採り上げたというところに味わいがあるのであろうが。この「マリア」を芥川は「永遠に守らんとするもの」と呼ぶのである。

⑤永遠に女性なるもの　ゲーテの「ファウスト」第二部第五幕の最終場面、合唱する深秘の群れのことばに「永遠に女性なるもの／我等を引きて往かしむ」とある。永遠不変の女性の本質、純粋な女性そのもの、の意。後世は「マリア」と言えば「人類女性の代表」とか「女性の象徴」とか、俗にいう「聖母マリア」式の母性を想像する。世に「マリア観音」なる言葉もあって、後人はこの「マリア」に「観世音菩薩」のイメージを重ねたりしている。この場合、女性のもつ最高最善の要素を一身に具足し給うのが観音で、身を三十三身に現じて六道の衆生を救済しようとする誓願のもと、忍辱柔和の相よりその魅力を発揮して世の男性を救済し給う菩薩でもある。

⑥永遠に守らんとするもの　革新に対して保守、浪漫主義に対して現実主義が想起される。次の章で聖霊に対して「永遠に超えんとするもの」と呼んでいるのと対照的である。現実に飽き足らずして現実を超えとしつづけるものに対して、守らんとするものは、この現実にあくまでも立脚して、現実に終始しようとするもの、この現実に徹しようとするものである。現実そのもの。

⑦涙の谷　バカの谷のこと。「旧約聖書」詩篇第八十四篇六に「かれらは涙の谷をすぐれども其処を多く泉ある所となす」とある。天国に対して苦難にみちた現世をいう。

（解）

マリアに永遠なる女性や理想的母性像を見ようとするのは後世一般の風潮であろうが、マリアとは「永遠に守らんとするもの」の象徴であり、マリアの一生とは平凡なる女性、そして偉大なる男性を生んだ一人の女性のそれの如く、かしましきジャーナリズムにとりまかれた忍耐の連続の一生そのものである。従って彼女の中には世間智と愚と美徳とが一つになって住んでいた。ニイチェの叛逆は無神論者としてクリストに対したというよりも寧ろ本質的に「永遠に守らんとするも

の」に対し超人哲学者としての叛逆であったであろう。そして又マリアを取り巻く後世の偏見と迷信とに対する姿勢もあったであろう。「マリアは唯の女人だった」と述べて次にすぐ「が、或夜聖霊に感じて忽ちクリストを生み落した」とつづけたのは、勿論この聖書の記述をそのまま肯定的に述べたのではなく、「忽ち」などいう軽い揶揄的口吻にも見られる如くマリアを聖女扱いする後世の偏見に対して「唯の女人」であるという文意にそうた述べ方であろう。

3　聖　霊

我々は風①や旗の中にも多少の聖霊を感じるであらう。聖霊は必ずしも「聖なるもの」ではない。唯「永遠に超えんとするもの」である。ゲエテはいつも聖霊に②Daemon の名を与へてゐた。のみならずいつもこの聖霊に捉はれないやうに警戒してゐた。が、聖霊の子供たちは――あらゆる③クリストたちは聖霊の為にいつか④捉はれる危険を持つてゐる。聖霊は悪魔や天使ではない。勿論、神とも異るものである。我々は時々⑤善悪の彼岸に聖霊の歩いてゐるのを見るであらう。善悪の彼岸に、――しかしロムブロゾオは幸⑥か不幸か精神病者の脳髄の上に聖霊の歩いてゐるのを発見してゐた。

（注）

①風や旗　2章の「マリア」のところで「多少の……」という言い方をしたのと同じく「多少の聖霊を」と言ったのである。これは風や旗の動くのを見て、そこに現実を超えようとする浪漫精神の湧出を感じる、或は触発されるという風に解される。風や旗などと言えば例の漱石の「草枕」にも出て来る禅問答が想起される。「草枕」には、「ある時二人の僧が、幡が風に動くのか、風が幡を動かすのかと論争した。六祖慧能という人がそれを聞いて、いずれでもない、心が動くのだと教えた。」とある。

②Daemon 又は Dämon（ドイツ語）。神と人間との中間者。時に悪魔とも訳す。「闇中問答」（昭和二）に「或声　では俺を誰だと思ふ？／僕　僕の平和を奮ったものだ。僕のエピキュリアニズムを破ったものだ。僕の――いや、僕ばかりではない。昔支那の聖人の教へた中庸の精神を失はせるものだ。お前の犠牲になったものは至る所に横はってゐる。文学史の上にも、新聞記事の上にも。／或る声　それをお前は何と呼んでゐる？／僕　僕は何と呼ぶかは知らない。しかし他人の言葉を借りればお前は僕等を超えた力だ。僕等を支配するDaimōn だ。」とある。この「闇中問答」の主旨より察すれば、聖霊にデーモンの名を与えたゲーテに芥川は賛成しているようである。

③クリストたち　第1章の「この人を見よ」の中で「わたしのクリスト」とあるから、「誰々のクリスト」「誰それのクリスト」という風に各人の解釈によるクリストを認めて「クリストたち」という風に

複数にしたのであるかとも考えられるが、後文の叙述からみて、これは単に「クリスト教徒達」という風に考えられる。さらば何故「教徒達」と言わなかったのであるか。己をむなしうして神に生きると信ずる人達を強く提示してクリスト達と呼んだのであろう。むろんイエスもこのクリスト達の中に入れているのであろう。そして聖霊の子供達は、デーモンに捉われたるものを指すであろう。

④捉はれる危険　「闇中問答」には「或声　お前はお前を祝福しろ。俺は誰にでも話しには来ない。／僕　いや僕は誰よりもお前の来るのを警戒するつもりだ。お前の来る所に平和はない。しかもお前はレントゲンのやうにあらゆるものを滲透して来るのだ。……僕は群小作家の一人だ。又群小作家の一人になりたいと思つてゐるものだ。平和はその外に得られるものではない。しかしペンを持つてゐる時にはお前の俘になるかも知れない。」とある。又、ゲーテの「詩と真実」に「わたしはこの恐ろしいものを避けようとつとめ、いつもの習慣に従い、一つの形象の背後に逃げた。」とある。

⑤善悪の彼岸　世俗的な善悪を超越したところの意。ニーチェの著作に「善悪の彼岸」がある。「或阿保の一生」（昭・二）には「彼はあらゆる善悪の彼岸に悠々と立つてゐるゲーテを見、絶望に近い羨ましさを感じた。」とある。

⑥幸か不幸か　イタリヤの精神病理学者、犯罪人類学者ロンブロゾオ（一八三六―一九〇九）が精神病者の脳髄の上に聖霊の歩いているのを発見した事は「聖霊」といえば「聖なるもの」とか「天使」とかと即断する世の多くの迷信家や偶像崇拝者達の仲間入りをしなくても済んだ事が「幸」とも言えるし、又この科学者がデーモンの真の姿を、かいま見した為に「神」と対決せざるを得なくなった事、「肯定」か「否定」かの厳しいところに真面せざるを得なくなった事は安易な世の幸福に浴する事が出来なくなったという意味では「不幸」とも考えられる。

（解）

「聖霊」の主旨は、作品「闇中問答」のテーマに近いものであろう。真実の「神」なるものの存在はともかくとして、「聖霊」なるものは我々に案外親しい存在で、風や旗の中にだって感じられる。芥川にとってそれは「詩の神」或は芸術上のデーモンとして感じられるものである。而してこのデーモンに捉われたる者には平和が失われる。即ち世の幸福から見はなされる。

――クリストをはじめその教徒達はいつかこのデーモンに捉われる危険を持つ。

――芥川自身その危険を常に、狂気に近い恐怖の心で感じている。

4　ヨセフ

クリストの父、大工（だいく）のヨセフ①は実はマリア自身だった。彼のマリア②ほど尊まれないのはかう云ふ事実③にもとづいてゐる。ヨセフはどう眼眉（ひいきめ）に見ても、畢竟余計（ひっきょうよけい）ものの第一人だった。

（注）

①ヨセフ　マリアの夫。「マタイ伝」第一章、「ルカ伝」第二章。又「ルカ伝」第三章二三には「イエスの、教を宜べ始め給ひしは、年おほよそ三十の時なりき。人にはヨフの子と思はれ給へり。」とある。普通クリストはマリアの子と言われ、ヨセフの子といわれない。ヨセフが早く死んだ為かとルナンは言う、「イエス伝」（第五章）に「ヨセフは、その子が公けの役割を演ずるに到らぬうちに、亡くなつた。かくてマリアが家長となつた、さうしてこの故に、人々は、イエスを、他の大勢の同名人と区別したいとき、大低の場合、『マリアの子』と呼んだ。」とある。

②マリア自身　ルナンの解釈はともかくとして、芥川によれば、イエスを「ヨセフの子」と呼ばず「マリアの子」と呼ばしめたのは後世の大衆であった。神の子イエスを生んだ親の栄光をひとりマリアにのみ帰せしめたものは、つまりはジャーナリズムである。「ヨセフは実はマリア自身だった。」という言葉は芥川の文学的表現で、そこには「神の子イエス」も私生児だという気持や、ストリンドベルヒのように子は遂に女のもの、母のもの、そして「父」は永遠にさみしきもの、という感概がこめられているのではないか。

③かう云ふ事実　ヨセフというのはマリア自身のことで、ヨセフというのはただの便宜的、形式的なもので、もともと存在しはしなかったのだ。これが事実だ。

（解）

古来、偉人有名人の父親で尊敬の払われない者がある。ヨセフはその代表的存在、つまり余計ものの第一人だ。子は遂に母のものか。ともかく、キリストはマリアの独占物だ。

5　エリザベツ

マリアは①エリザベツの友だちだつた。②バプテズマのヨハネを生んだものはこの③ザカリアの夫、エリザベツである。④麦の中に芥子の花の咲いたのは畢に偶然と云ふ外はない。⑤我々の一生を支配する力はやはりそこにも動いてゐるのである。

（注）

①エリザベツ　「ルカ伝」第一章五に「ユダヤの王ヘロデの時、アビヤの組の祭司に、ザカリヤといふ人あり。その妻はアロンの裔にて名をエリザベツといふ。」とある。

②バプテズマのヨハネ　バプテズマとは洗礼を施す者の意。イエスに洗礼を施し、彼の先駆者として預言活動をした人物。

③ザカリアの夫　夫は妻の誤り。

④麦の中に芥子の花の咲いた　角川版・大係本の注には「瓜の蔓に茄子がなった、と同じような意味の比喩。」とあって一応理の通る説で

あるが、この俗諺は本来は「瓜の蔓に茄子はならぬ」（親に似た子しかできない）であって、それよりは「鳶が鷹を生む」（平凡な親から非凡な子が生まれる）の方が良いが、然しこの譬は、マリアがイエスを、そしてエリザベツがヨハネを生んだ事が奇蹟的な事柄だという風に、平凡な女が偉人を生んだ事にとられ易いが、この文章では、瓜や鳶が夫々、茄子や鷹を生んだという風にとるべきではなく、イエスにヨハネが洗礼を施すという聖書中の大事実があるが、その母親達が又友人関係であったという、この偶然的事実が、麦の中に芥子の花の咲くが如く奇蹟的であったという文意であろう。

⑤我々の一生を支配する力　「侏儒の言葉」（運命）に「遺伝、境遇、偶然、――我々の運命を司るものは畢竟この三者である。自ら喜ぶものは喜んでも善い。しかし他を云々するのは僭越である。」とある。又「闇中問答」には「四分の一は僕の遺伝、四分の一は僕の境遇、四分の一は僕の偶然、――僕の責任は四分の一だけだ。」とある。

（解）

聖書の中の、聖なる大事実にも、我等の一生を支配する力―偶然が大いに働いている。という事を、芥川は陰にこもった口吻で強調する。

6　羊飼ひたち

マリアの聖霊に感じて孕んだことは羊飼ひたちを騒がせるほど、醜聞だつたことは確かである。クリストの母、①美しいマリアはこの時から②人間苦の途に上り出した。

（注）

①美しい　マリアの美しさは聖書には別に説かれていない。しかし後の宗教画に描かれたマリアは非常に美しい。芥川が何故「美しい」と述べたのか。後世の宗教画などの甘さや俗悪さに意識的に調子をあわせた皮肉な口吻か。或は私生児を生んだ美婦という風な彼の嗜好から来る文飾か。

②人間苦　醜聞そのものが人間苦に結びつくものであるが、非凡人、天才、聖者、を生んだ事がこれ又生母にとって大きな人間苦ではなかったか。言うまでもなく、イエスは政治家や、実業家として非凡だった訳ではなく、その死は又生母を泣かせている。（「33・ピエタ」では芥川は「年をとつたマリアはクリストの死骸の前に歎いてゐる。」と書いている。）

（解）

後世のヂャーナリズムが美化した聖霊によるイエスの誕生を「醜聞

」なりと断定し、これをマリアの人間苦に結びつける芥川の心は、偶像崇拝的な後世の解釈の甘さや、事の真相を粉飾、糊塗する、その残酷さを指摘している様である。イエスの誕生はまぎれもなく一つのスキャンダルであり、常人でない、天才（聖者）を生んだマリアの現実を、一人の女人の人間苦への出発と見ている。

7　博士たち

①東の国の博士たちはクリストの星の現はれたのを見、黄金や②乳香や③没薬を宝の盒に入れて捧げに行つた。が、彼等は博士たちの中でも僅かに二人か三人だつた。④他の博士たちはクリストの星の現はれたことに気づかなかつた。のみならず気づいた博士たちの一人は高い台の上に佇みながら、（彼は誰よりも年よりだつた。）きらきかにかかつた星を見上げ、はるかにクリストを憐んでゐた。

「又か！」

（注）

①東の国の博士たち　「マタイ伝・第2章1・2」に「イエスはヘロデ王の時、ユダヤのベツレヘムに生れ給ひしが、視よ、東の博士たちエルサレムに来りて言ふ、『ユダヤ人の王とて生れ給へる者は、何處に在すか。我ら東にてその星を見たれば、拜せんために来れり』」。又「同、10・11」に「かれら星を見て、歓喜〔ヨロコビ〕に溢れつつ、家に入りて、幼児のその母マリヤと偕に在すを見、平伏〔ヒレフ〕して拜し、かつ宝の匣をあけて、黄金・乳香・没薬など禮物を献げたり。」とある。

②乳香　かんらん科の常緑喬木。北アフリカ原産。高さ約六メートル葉は羽状複葉。茎頂または葉のつけ根に、白色または淡紅色の小花を円錐状につける。幹から採取した黄色透明の樹脂を乳香と称して香粉・薫煙料とする。

③没薬　アフリカのソマリ山地に産するかんらん科の灌木の樹脂から製した赤褐色または帯黄白色で半透明の塊。特異の臭気と苦味とがあり、膀胱・子宮などの分泌過多抑制剤・通経剤・健胃剤・含嗽剤などに用いる。

④僅かに二人か三人だった　聖書には特に二・三人という風な記述はない様である。この博士たちについての記述はすべて芥川の空想によるようで、つまり、僅かに二人か三人だった、（であろう）他の博士たちはクリストの星の現れたことに気がつかなかった（であろう）、という風に。そして、この辺の芥川の筆は、聖書などに扱われた、キリスト降誕という、驚天動地の大事件に対して皮肉な表現を弄んでいる。

（解）

（誰よりも年よりだった）博士の一人が高い台の上に佇みながら、クリスト生誕を告げる星を見上げ、はるかにクリストを憐んで「又

か！」と溜息を洩らしている、と書いたところにこの章の主旨があるであろう。「又か！」と言うのは、これまでに他に何人も生れて来た事を意味している。誰がか、と言えば、それはむろんキリストたちである。キリストたちとは、第3章「聖霊」にあるように、聖霊に捉われたるもの、地上の平和や、己一個の幸福などはつゆ顧りみない「永遠に超えんとするもの」に憑かれたるものである。刺の途をゆく者の生誕を見た時、人生の現実生活の上で年齢を重ねた者の目からは、それを憐れまずにいられなかった、というこれは表現である。ここには芸術の神に憑かれた、或はその危険を思う芥川自身の姿に対する自己観察があるだろう。自嘲もあるのかも知れない。こんなところにも、イエス像に自画像の重なる趣きがないでもないであろう。